

『ルイ・ボナパルトのブリュメール十八日』

カール・マルクス著 （植村邦彦 大田出版 1996年）

第一章

「ヘーゲルはどこかで、すべての偉大な世界的事実と世界史的人物はいわば二度現れる、と述べている。彼はこう付け加えるのを忘れた。一度は偉大な悲劇として、もう一度はみじめな笑劇として、と」。（P6）

ヘーゲルは人間社会の歴史を、個人の意識を越えた普遍的な理性・精神が自己実現していく過程とした。それに対して、マルクスは、肉体と精神を持った人間は現実生きる社会（市民社会）の社会的諸条件に規定されていることをヘーゲルは忘れてしていると批判する。

「人間は自分自身の歴史を創るが、しかし、自発的に、自分で選んだ状況の下で歴史を創るのではなく、すぐ目の前にある、与えられた、過去から受け渡された状況の下でそうする。」（P7）

「すぐ目の前にある、与えられた、過去から受け渡された状況」とは、具体的には過去の労働の成果である「生存諸条件」「生産手段」あるいは「資本」とも考えられる。が、ここでは過去が亡霊として生ける者の思考や行為にとりつく状況を描いている。

「偉大な悲劇」である1793-95年の革命では、市民社会の闘士達は、ローマ帝国の決まり文句を血肉化して自由に使いこなしながら、現実の社会に近代市民社会を創り出し、それを基盤に自由競争経済を発展させた。小作人には分割地所有を認め、解放された国民の工業生産力が利用されることを可能とする諸条件を創り封建的諸姿態を一掃していった。

だが、一度新しい社会構成が打ち立てられると後には与件として扱われ、社会変革に使われたローマ帝国時代の決まり文句や衣装は理想像と芸術形式つまり自己欺瞞として使われるようになっていった。

「それらの革命の中で死者を蘇らせたのは、したがって新しい闘争を賛美するためであって、昔の闘争のパロディーを演じるためではなかった。与えられた課題を空想の中か誇張するためであって、それを現実の中で解決するのを恐れて逃げ出すためではなかった。革命の精神を再発見するためであって、革命の亡霊を再び出没させるためではなかった。」（P10 L3~7）

（参考）マルクスは、これらの事情は、イギリスでも、1世紀間のズレで当てはまる。としている。

<1845-51年の革命の場合> （P10 L8~）

マルクスによれば、本来なら、19世紀は18世紀の市民革命によって発生した（初期）資本主義社会の諸事情を前提として展開されていたので、19世紀における革命は、資本主義社会の社会的状況・諸関係・諸条件を出発点としてそれ

自体を変革していくプロレタリア革命・階級闘争でなければならなかった。

「19世紀の社会革命は、その詩情を過去から得ることはできず、未来から手に入れる以外にはない。社会革命は、過去へのあらゆる迷信を捨てないかぎり、自分をうまく扱うことができない。」（P11～12）

資本主義社会の矛盾が、プロレタリア革命を引き起こす諸関係自体にこう叫ばせる「ここがロードス島だ、ここで跳べ！ここにバラがある、ここで踊れ！」と。

しかし、1848～51年の革命では、単に「昔の革命の幽霊が出ただけであった」。（P10）そして1852年5月2日には「すべては、その敵でさえも魔法使いとは呼ばない一人の男の呪文の前に、幻影のように消え去った。」（P15）

プロレタリアートとブルジョアジーとの階級対立が、必ずしも2月革命とその後の一連の展開には適格に当てはまるかどうか。またそれとは別に、ボナパルティズムは自由主義から帝国主義への移行期にすぎないのか。再検討する必要があると思われる。

<1848年2月24日～5月4日> （P16 L6～）

そもそも、2月革命は、「予期せぬ出来事」として発生したものであった。それは、選挙権の範囲や議会改革をめぐる、ギゾー内閣に不満を持つ一部のブルジョア反対派が『ル・ナショナル』紙を通じて呼びかけたパリ12区の宴会への結集によって起きた支配者層内部の勢力争いの産物であったとも言える。

1840年代の世界的不況のなかで社会改革や変革を望む声に半ば押される形で革命の表舞台に登場した各党派は、それぞれ共和国を自分に都合よく解釈するだけで、現実の社会に対して、それぞれの主張を実践することはなかった。

（参考）国立作業場、（国民衛兵、遊動警備隊）

臨時政府の中心人物であり共和派であったラマルティールは、失業労働者救済を名目に、「国立作業場」を設立したが、その真意は、放置しておけば反政府的となり、破壊的となる半失業の職人＝労働者達の一部を従順な公務員に作り変え、反政府軍の力を削ぐことが目的であった。しかも、社会主義者ルイ・ブランが理想とする工場像に合致しているようであったため、社会主義者の支持も得られた。これは、ラマティールら支配層の自己の安全を守るための道具であったが、状況の変化によっては、逆に被支配層に、自らの政治生命を奪うきっかけを与えてしまう。

これらは、憲法・その他の法律などと同様に、革命的共産主義者から社会主義者・小市民的民主派・ブルジョア共和派さらに王朝派へと続く後方へ連鎖的な倒壊を引き起こす、党派どうしを結ぶ金具の役割を担っているように思われる。

<1848年4月23日 憲法制定国民会議選挙（普通選挙）実施>

有権者数約25万人

960万人

「パリのプロレタリアートが、彼らの前に開かれた偉大な展望に見とれて、社会の古い諸勢力は、集合し、平静を取り戻し、正気に返り、国民の大衆の中に予期せぬ支えを見いだした。すなわち、農民と小市民であるが、彼らは七月王政の

遮断機が倒れた後に、突然政治の舞台に飛び込んできたのである。」（P 18 L 3～L 8）

「[これまでは]王の名の下にブルジョアジーの限られた一部が支配してきたとすれば、今や人民の名においてブルジョアジーの全体が支配することになる。」（P 19 L 7～L 9）

普通選挙によって議会に入ってきたのは、労働者層だけではなかった。小市民や農民層、議院外反対派保守層などその他、雑多な議院外勢力を議会へと呼び込んで、それらが、すべてを代表するが、なにものにも決して代表されえない「人民の意志」を形成していく。反論の余地を残さない「所有、家族、宗教、秩序」という合言葉が、敗北していく党派すべてに投げかけられ、最後には共和制自体に投げかけられる。

「すべての階級と党派は、六月の日々の間、無政府の党、社会主義の、共産主義の党としてのプロレタリア階級に対抗して、秩序の党へと一体化した。」（P 22 L 7～）プロレタリア階級は、市民的共和制の基礎固めの役割を果たす。

第二章

共和派のブルジョア的分派の各派をひとつにまとめ、勢力を拡大させていた原因は「大きな共通利害」でも「固有の生産諸条件」でもなく、共和派支持者の「ルイ・フィリップに対するこの国の個人的反感、昔の共和派の記憶、何人かの心酔者の共和主義的信念、とりわけフランス・ナショナリズム」（P 27）であった。しかし、この共和派支持者の「隠された帝国主義」は、共和制の下では、「ルイ・ボナパルトという姿」となって現れ、逆に共和派政党を壊滅させることになる。これが共和派の「支配と解体の歴史」である。

共和派は、その排他的な性格ゆえに、金融貴族・社会主義者・小市民あるいは民主的共和派を排除することによって、当面の大ブルジョアジーの利害を代表することになる。多数派を占めたこの党派の役割は、市民的共和制の基礎固めをして、秩序党とルイ・ボナパルトとの明日の権力闘争が行われる場の地ならしすることであったため、憲法が完成すると即座に議会内少数派へと転落してしまった。

「彼ら[共和派のブルジョア分派]は、王権に対するブルジョアジーの自由主義的反乱によってではなく、資本に対するプロレタリアートの暴動が散弾砲撃で鎮圧されたことによって、支配に達したのである。彼らが最も革命的な事件として思い描いていたものが、現実には最も反革命的な事件として起こった。」（P 29 L 5～）

共和派の手にした果実は、将来自らを楽園から追い出すことになる知恵の木から落ちた実であった。

<第二期 第一局面 1848年5月4日～6月25日>

～新憲法～（P 29 L 14～）

共和派は新憲法の条文に、自分自身の安全を守るために、様々な傍注を付けた。そのため、どの条文にも反対の命題を含み、秩序党にも民主派にも自由に解釈で

きた。特に立法議会と大統領との関係を規定した条文は、後の秩序党とルイ・ボナパルトとの全面衝突の火種を持ち、憲法の急所であった。

「国民議会は憲法に則って大統領を罷免することができるが、大統領の方は憲法そのものを片付けることできないように、起草されている。」（P 32 L 10～）

大統領と国民会議との「代表される者」と「代表する者」との関係

普通選挙は、選ばれた者（国民会議）に、選んだ（フランス人民）と形而上的〔抽象的〕な関係をもたせ、その個々の代表において国民精神の多様な側面を具現化させる。

直接選挙は、大統領に、人民と個人的な関係をもたし、国民精神を受肉化させる。

～パリの戒厳令～ （P 33～）

憲法それ自体が内部に矛盾を孕んでいるのなら、それが成立する過程もまた矛盾を孕む。＜6月事件＞ パンティオン広場に集まった労働者のデモに対して、国防相で共和派でもあるカヴェニャックは、秩序党と結託し、政府の国民衛兵出動命令を無視して、政府の信用を喪失させ執行委員会を解散させ、独裁と戒厳令を実行した。

「カヴェニャックが知るべきであったのは、かれはプロレタリアを殺害しただけではなく、共和制そのものをも、また殺害したということであった。彼が守ったのは、共和制の形骸でしかなかった。これゆえに、彼の政治生命も六ヶ月しかもたなかったのである。」

（河野健二著 『現代史の幕あけ』 P 111～P 112）

「憲法が後には銃剣によって始末されるとすれば、それはすでに胎内にいるうちからまさに銃剣によって、しかも人民に向けられた銃剣によって庇護され、銃剣によって誕生させられなければならなかった」。（P 36 L 13）

憲法を生み出すために、パリに戒厳令を敷いたことは、後にボナパルトに対して、憲法を破壊する武力（クーデターの親衛隊）と、憲法違反となるイタリア占領のきっかけを与えてしまった。

そもそもブルジョア共和派の支持者は、大地主であり金融貴族と大工場経営者であり、彼らは共通して王朝支持派であったため、共和国の建設と同時にブルジョア共和派を押しつけ、新たに秩序党へと結集した。

秩序党は表面上はブルボン朝支持派・オルレアン朝支持派とに分けているが、本質的には両派は、資本所有者（農業資本・工業資本）として共通利害のもとに、多数派勢力を占めた。

大統領に選出されたルイ・ボナパルトは、秩序党内閣を組織させるとその背後にかくれて、そうして秩序党の国民議会への策略・誹謗（言語）を習得し、1851年12月2日にそれと同じやり方を秩序党に対して反復してみせた。

「秩序党自身が、彼らがまだ国民議会ではなく、まだ内閣でしかなかった時に、議会政権に烙印を押ししていた」。（P 46）

だが、秩序党もまた議会政権の産物であり、議会政権なくしては存在しえな

った。議会を離れて人民に直接話しかけるルイ・ボナパルトのみが、議会消滅後も存在しえた。

第三章

「第一次フランス革命では、・・・どの党派も、より進んだ党派に支えられていた。どの党派も、革命を遠くまで導きすぎて、もはや革命についていくことも、まして革命の先頭に立つこともできなくなると、すぐさま背後のもっと大胆な同盟軍によって押しのけられ、ギロチンに送られる。革命は、こうして上昇線を描いて進んでいく。」（P 51）

「1848年の革命は逆である。」「どの党派も、前に突き進む党派に背後から襲いかかり、後戻りする党派に前から寄りかかる。あらゆる党派がこんなこっけいな姿勢をしてバランスを失い、仕方がなしに顔をしかめてから、風変わりなカプリオーリをして崩れ落ちるのも、不思議はない。革命はこうして下降線を描いて進み、二月の最後のバリケードが撤去されて最初の革命政権が樹立される前に、すでに革命はこの後戻りを始めている。」（P 51～52）

この下降線を描く革命は、構成する諸要素すべてが、それぞれ自己矛盾を内蔵している。1848－52年の革命運動とは、カレンダーがその唯一の原動力であるかのように、同じ緊張と弛緩をたえず繰り返すことで人を疲れさせ、周期的に自らを絶頂へと駆り立てるように見える対立も、ただ鈍くなり萎んでいくだけで、決して解消されえないものと思われる。（P 53 要約）その原因は、周期的に繰り返される普通選挙制度とそれに基づく議会制度なのであろうか。すくなくとも、このイメージは、物質的諸条件による階級闘争のイメージとは異質なものである。「国民の全体意思は、普通選挙権という形であまりにしばしば自らを表明するうちに、・・・ついには、一人のカリブの海賊の個性的意思のうちに、その表現を見いだす。」（P 53 L 8～）

～政治的肩書きと社会的肩書き～（P 54 L 2～）

<秩序党>

議会制度の枠組みがもたらす「反動」「共和派」「モンターニュ」派という政治的表現も表面的な外見にすぎず、この外見の奥には、「階級闘争とこの時代に固有な容貌が隠蔽」（P 57 L 5～L 6）されている。同様に、秩序党は、正統王朝派とオルレアン派という政治的肩書きの裏には、それぞれ相反する大土地所有と資本との利害関係が働いている。

「歴史的闘争においては・・・諸党派の決まり文句や思い込みと、彼らの現実の組織や現実の利害とは区別されなければならなし、彼らの想像と彼らの現実とは区別されなければならない。（P 58～59）

議会の外では、秩序党は、オルレアン朝派と正統王朝派とに内部分裂し対立するが、議会の中では、「市民的秩序の代表者として」（P 60）「ブルジョア階級として、現実の仕事を片付ける。」（P 60）

秩序党の無制限で苛酷な支配はそもそも議会的共和制という形態の下でのみ可能なものだったが、同時に共和制下では、選挙以外の闘争手段を持たない諸階級と直接対立しなければならないため、共和制は自分達の社会的基礎を掘り崩すこ

とになる。ブルジョアジーの共和制に対する敵意はこのためである。

＜社会＝民主派＞

秩序派とプロレタリアートとが背後で物質諸条件に規定されているのに対し、社会主義者と民主主義者との奇妙な組み合わせは、議会の産物にほかならなかった。社会主義者は「急進派」という烙印を恐れて民主的な言説を用い、一方で、民主主義者は議会内の「共和派」と「反動」の単純な勢力争いという見方によって、社会民主派を結成した。その特徴は、議員と支持者との「代表する」／「代表される」の関係に現れている。

「民主派の議員たちはみな商店主であるか、あるいは商店主を熱愛している、と思いついていけぬ。彼らは、その教養と知的状態からすれば、商店主とは雲泥の差がありうる。」（P 63 L 6～L 9）

この民主派議員と支持者との不一致を、抽象的な憲法の条文によって埋め合わせようとした点は、国民議会とフランス人民との形而上的関係と同じであると思われる。

「重要なのは、〔秩序派は〕時間と機会が彼ら〔小市民的民主派＝モンターニュ派〕を強化する前に、彼らを国民議会から街頭へとおびき出し、彼ら自身に自分の議会的権力を破壊させることであった。」（P 64）

「モンターニュ派の主要部分は一己の前衛を見殺しにした。彼らの宣言への署名を拒絶したのである。・・・小市民は自分の代表を裏切った。」（P 65）

「民主主義者は、小市民を代表しているので、したがって二つの階級の利害が中和しあっている一つの過渡的階級を代表しているので、自分はそもそも階級対立というものを克服しているのだと思込んでいる。」（P 68）

「ブルジョアジーは、立憲的体制の防衛のための反乱を、無政府的な、社会の転覆を目指した行為だと非難することによって、執行権力が彼らに対立して憲法を侵害しようとする場合に反乱に訴えることを、自分自身に禁じた。」（P 71）

「一八四八年六月の日々には、国民衛兵としてのブルジョアジーと小市民が、プロレタリアートに対抗して軍隊と結合したが、一八四九年六月一三日には、ブルジョアジーは小市民的な国民衛兵を軍隊によって四散させ、一八五一年一二月二日には、ブルジョアジーの小市民的な国民衛兵そのものが消え失せており、ボナパルトが事後的に国民衛兵の解散命令に署名したときには、彼はただ事実を確定しただけだった。」（P 75）

「国民議会がかなり長い幕間に舞台から消え去って、共和国の頂点に、たとえ貧弱であろうともただ一人の姿、ルイ・ボナパルトの姿しか見えないようにしてしまい、それに対して秩序党は、公衆の憤激の種になりながら、その王党派の構成部分に分かれて、相争う王政復古の欲望にふけた。」（P 76）

【以上】